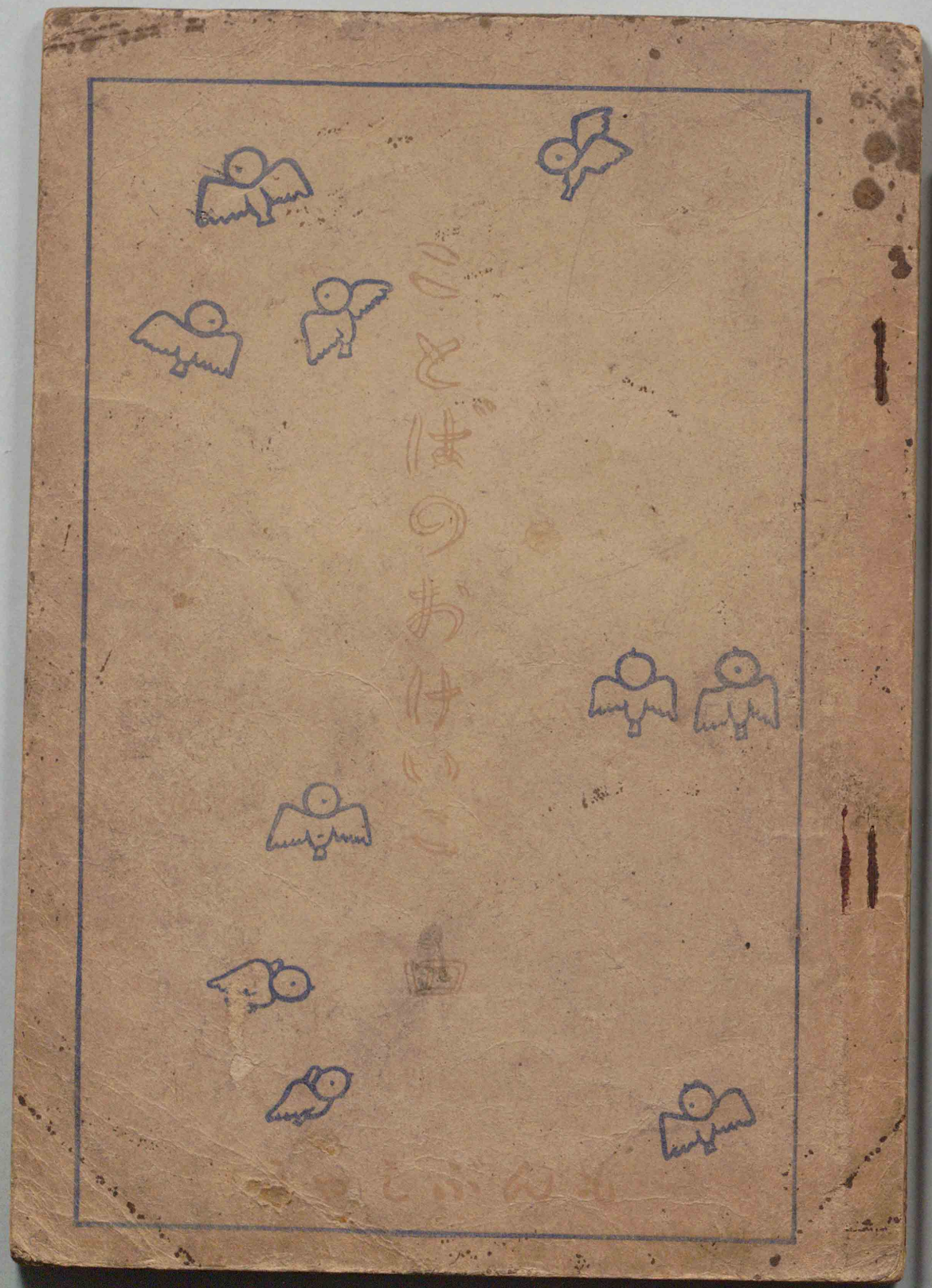
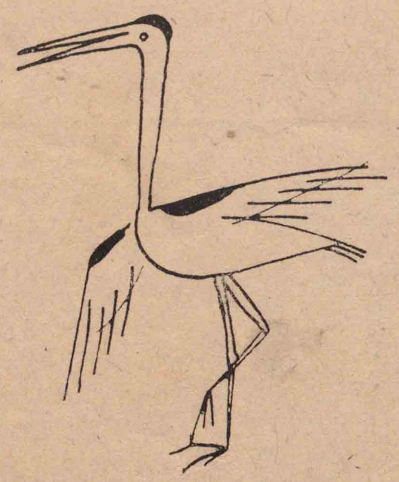


43120
教科書文庫
4
810
33-1942
01304
49510

こいけおのぼとこ



うやしぶんし

中央図書館

広島大学図書
0130449510

もくろく

一　富士山……三
二　早鳥……四
[redacted]……八
四　乗合自動車……十一
[redacted]……十五
六　かけっこ……十八
七　かぐやひめ……二十一
八　たぬきの腹つづみ……二十四
九　金の牛……二十六
十　満洲の冬……二十九
十一　鏡……三十二
[redacted]……三十五
十三　新年……三十八
十四　いうびん……三十九
[redacted]……四十三
十六　雪の日……四十六
十七　白兎……四十八
十八　たこあげ……五十三
十九　豆まき……五十六
[redacted]……六十
[redacted]……六十一
[redacted]……六十四
二十三　おひな様……六十七
二十四　北風と南風……六十八
二十五　羽衣……七十四

一　富士山

(一)

どこから見ても、いつ見ても、
富士のお山は美しい。
すそ引くはての松原に、
太平洋の波が立つ。
日本一のこの山を、
世界の人があふぎ見る。

(二)

あたまを雲の上に出し、
四方の山を見おろして、

かみなりさまを　下に　聞く、
富士は　日本一の　山。

青空　高く　そびえ立ち、
からだに　雪の　きもの　きて、
かすみの　すそを　遠く　引く、
富士は　日本一の　山。

二　早鳥

(一)「どうも　困った　もの　だ。」

「お米が　半分も　できない。」
「なんとか　ならない　ものかなあ。」
「しかたが　ない。　この　木を　切る　ことに　しよう。」
「こんな　大きな　木を、切って　いい　もの　でせうか。」
「でも、この　木は、切るより　ほかに　みちが　あるまい。」
「くりぬいて、舟を　作るが　よい。」
「えいや、えいや。」
「なんと　いふ　早い　舟　だらう。」
「ふしぎ　だ、ふしぎ　だ。」
「いや、ふしぎでも　何でも　ない。　あの　勢の　よい　く

すの木で、作った舟だ、勢のよいのがあたりまへさ。考へてみれば、このすばらしい舟になるために、あの木は、ぐんぐんのびたのかもしれない。鳥のやうに早い舟だから、早鳥といふ名をつけよう」。

(二)

午後になると、東がはの何十といふ村々が、日かげになります。「どうも困ったものだ」。「お米が半分もできないぞ。」大勢の大工を集めて、舟を作りました。

「鳥のやうに早い舟だから、早鳥といふ名をつけよう」。

米や、麥や、豆をつんで、都の方へたびたび通ひました。

(三)

この木を切ることにしよう
早鳥といふ名をつけよう

どうするかと いふことに なりました
せんどうたちも 見て ゐる 人も いひました

かいを そろへて
考へて みれば

(一)

[illegible]

本を 讀んで ゐると
うらの 畠に おた おかあさん
聞いて いらっしゃいました

四 乘合自動車

(一)

1 乘合自動車に 乘って 出かけました。
2 松並木を 通りぬけると、たんぼでは、稻を さかんに かり取って ゐました。
3 牛の 引いて ゐる 車を おひこしました。
4 サ村の 入口で、中學校の 生徒さんが 二人 乘り

こみました。

5 道が だんだん のぼりに なりました。

6 たうげに 来た 時、山と 山との 間から 海が 見えました。

7 たうげを おりた ところで、女の 子が 一人 乗りました。

8 川へ 来ました。橋を わたりました。

9 ホ町に 近い ところで、どこかの おばあさんが 乗りました。おばあさんは、[redacted] 孫が 汽車で 通るので、ホ町まで 見送りに 行くの ださう

です。

10 道の まん中で、にはとりが ゐさを ひろって ゐました。

11 ホ町に はいって、いうびんきょくの 前で 止りました。

(二)

たん	ぼで	は、	稲を
ました。			
生徒	さん	が、	海が
ひま	した。		

かり取って ゐ
見える。」と い

友だちが並んで、元氣よく手をふりました。

ふろしきの結びめから、日の丸の旗がのぞいてゐました。

席をあけると、おばあさんは喜んで腰をかけました。

[redacted]孫が、今日汽車で通ります。」

乗合自動車は本町につきました。

(三)

海が見える

一本の　くすの木が　生えました

答へますと

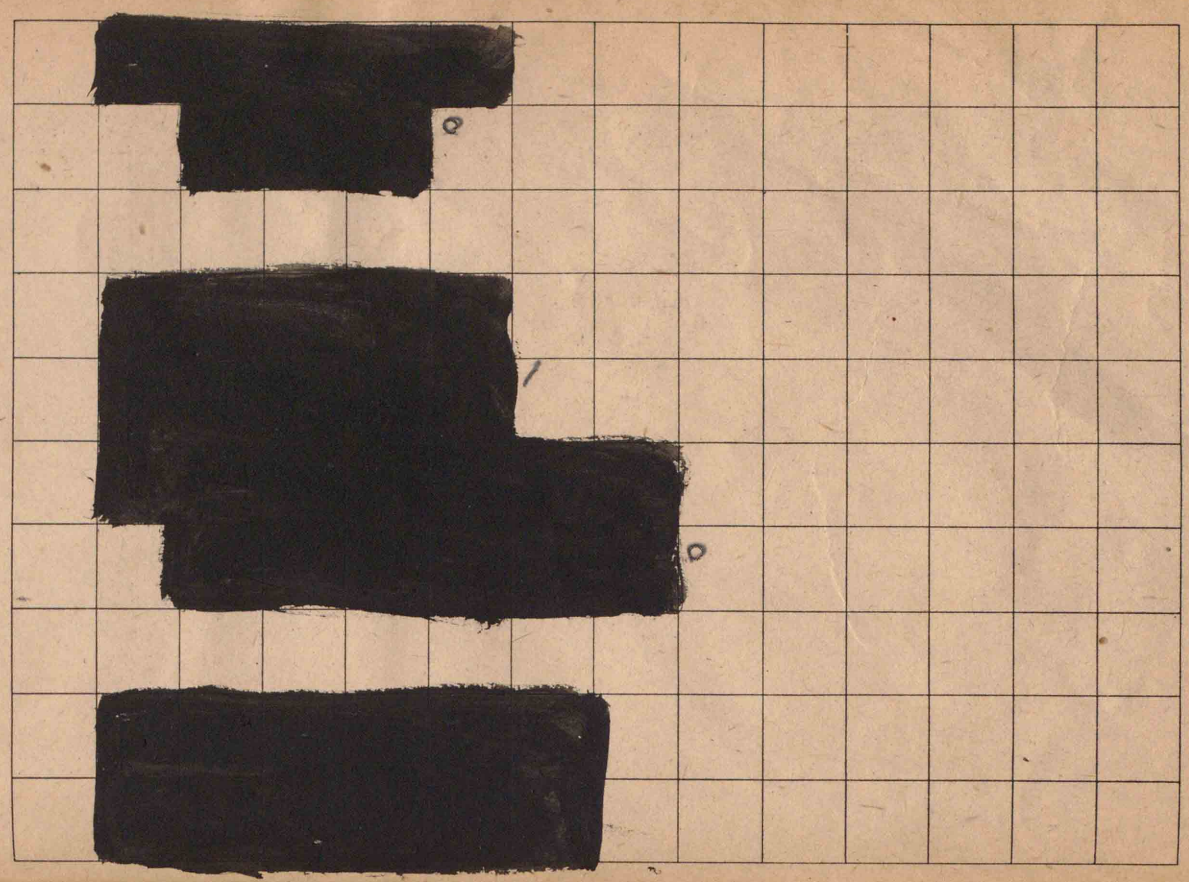
そろへて　こぎました

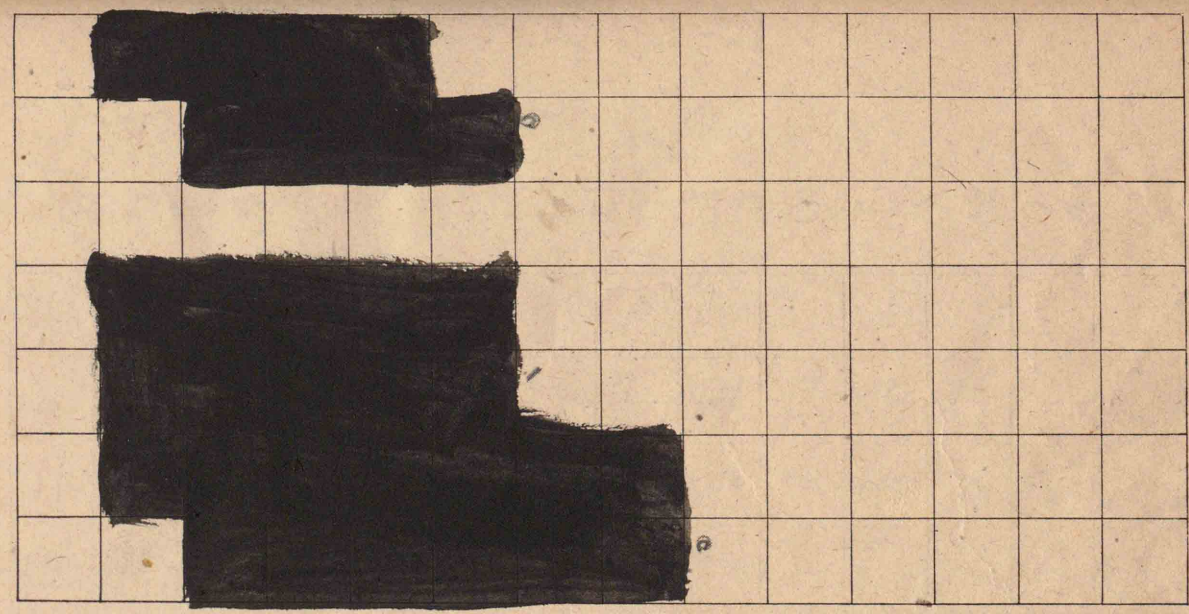
ありがたう

ありがたく　いただきます

(一)

[redacted]





(二)

六　かけっこ

(一)

白い線にそって並びました。

「用意。」と先生の聲。

二人がぼくを追ひこしました。

「負けるものか。」一生けんめいに走りました。

(二)

太郎「おとうさん、あしたは ぼくたちの うん動くわいですよ。」

父「さうか、お天氣 だと いいがね。」

太郎「おとうさん、大ぢゃうぶ ですよ。さっき ラジオで、あしたは はれ だと いひました。」

父「それは いいね。」

太郎「おとうさんも 見に 來て くださいね。」

父「困ったな。あしたは だいじな ようじで 行かれない。おかあさんに 行って もらひませう。」

太郎「いうぎと かけっこを します。」

父「早く 走れるかな。」

太郎「一生けんめいで 走る つもり です。」

父「よろしい。負けてもよいから、しまひまで走るのですよ。」

太郎「わかりました。しまひまで一生けんめいで走ります。

夕やけ小やけ
あした天氣になあれ。」

(三) 二人がぼくを追［い］こしました。
ごちゃごちゃになって聞［へ］ます。
よ［そ］うか。

手をたたいて笑って［い］るやうです。

(四) うん動くわいにしたことを話してごらんなさい。

七　かぐやひめ

(一)

竹の中から女の子が出ました。
小さいので、かごの中へ入れて
育てました。
むすこの嫁にしたい。といふ人
があります。
かぐやひめはある晩、月を眺め

て泣きました。

「月の世界から迎へにまゐります。お別れするのが、何よりも悲しうございます。」

「安心して、泣くことはおやめ。」

と、おぢいさんがいひました。

とのさまに申しますと、弓矢を持つたけらいたちが、守ることになりました。

おぢいさんは、入口に立つて番をしました。

天人がおりて来ました。

ご恩はけつして忘れません。月の世界から、おこ二人を拝んでをりませう。」

かぐやひめは天へのぼりました。

(二)

ざるやかごを作つてゐました
小さな女の子がゐました
根もとの光つてゐる竹
かうしてゐる間に

かぐやひめを　だいて　をります
番を　して　をります

かへらなければ　なりません
お二人を　拜んで　をりませう

八　たぬきの　腹つづみ

(一)

「さあさあ、集れ、月が出た。
みんなでつづみの打ちくらだ。」
お山の上では親だぬき、
ぽんぽこあひづの腹つづみ。

(二)

しよ、しよ、しようじゃうじ、
しようじゃうじの　庭は、
つんつん　月夜　だ、
みんな　出て　來い　來い　來い。
ぼくらの　友だちゃ
ぽんぽこ　ぽんの　ぽん。

負けるな、負けるな、
をしやうさんに　負けるな、
來い、來い　來い、來い　來い　來い、

みんな　出て　來い　來い　來い。

しょ、しょ、しょうじゃうじ、
しょうじゃうじの　はぎは、
つん　つん　月夜　だ、花ざかり。
ぼくらは　うかれて
ぽんぽこ　ぽんの　ぽん。

九　金の牛

(一)

海の中の島に、一匹の金の牛が

ねました。岩の上にあがって、四方を見わたしました。海の向かふの島に、草が一めんに生えてゐました。その草をたべようと思って、海の中へとびこみました。

金の牛は海に沈んでしまひました。これは滿洲の話です。

(二)

おなかがすいた[ので]、草をたべようと思って、[あちらこちら]歩きました[が]、この島には、一本

の　草も　生えて　ゐません　でした。

金の牛　は、ひとりごとを　いひました。

ふしぎに　今まで　すいて　ゐた　おなかが、急に　ぱいに　なりました。

ここから　見るだけ　でも、おなかが　いっぱいに　なるの　だ　から、あの　島の　草を　ぜんたい　たべたら、どんなに　おいしい　だらう。

(三)

草を　たべようと　思って　守らせる　ことに　しよう

なんと　おいしさうな　草　だらう

なんと　いふ　早い　舟　だらう

島が　見えました

草が　一めんに　生えて　ゐました

十　満洲の　冬

(一)

まどガラス　一めん、まっ白に　こほったのは　きれいな　もの　です。

じゅ氷と　いふのは　もっと　きれい　です。

日本の　子どもたちは、元氣よく　スケートを　します。

満洲人の子どもは、木でこしらへたこまをまはします。

(二)

寒さのためにガラス一めんまつ白にこほります。白くじやくが羽をひろげたやうなのがあります。氷の上に指で字を書きます。書になるとガラスの上の氷が消えます。木の枝がすつかり氷で包まれます。

満洲に住んでゐる日本の子どもはスケート場へ行てすべります。細い棒の先につけたひもでこまの腹をたたきます。

(三)

木の枝といふ枝。
おもしろくて おもしろくて たまりません。
寒ければ 寒いほど。

こんなに きれいには かけない でせう
お二人を 拜んで をりませう
明治の みかどを あがめませう

十一 鏡

(一) 花子さんは、鏡で 日の 光を 受けて、ねえさんの 顔へ あてました。

勇さんは、をんどりに 鏡を 見せました。をんどりは 鏡に うつる 自分の かげを めがけて、とびつい て 來ました。

(二)

鏡で日の光を受けて、二かいの窓にあててみました。をんどりは、首の毛をさか立てました。

[redacted]

(三)　もらへるのかと　思つて。
すべれるやうに　なります。
こんなに　きれいには　かけない　でせう。

(四)　花子さん　は、日の　あたる　ところ　へ、鏡　を　持つて　出ました。
「ほかの　をんどりと　思つて　ゐる　のだな。」と、勇さんは　思　ひ　ました。

[redacted]

十三　新年

(一)

お宮へまゐって、學校へ行って、
「君が代」歌って、
新年おめでたうございます。

書きぞめの字は「昭和の光」、
上手にできて、
新年おめでたうございます。

(二)

おめでたうございます
ありがたうございます
花子さんがゐます
本を讀んでゐます

(三)

新年にしたことを話してごらんなさい。

十四　いうびん

(一)

花子さんと春枝さんは、兩方に分れてすわりました。
「五錢の切手を一枚ください。」と、

花子さんがいひました。
「あしたから學校が始ります。」と
書いてありました。

(二)

一郎「すず木さん、いうびん。」

花子「はい、ありがたう。」

一郎「林さん、いうびん。」

春枝「どうも ありがたう。」

花子「新年 おめでたう ございます。」

春枝「新年 おめでたう ございます。」

花子
春枝「あら、二人とも おんなじ ですね。」

一郎「もう ありませんか。あったら 早く 出して くださ い。」

花子「こんどは、私が 先に 書きますから、春枝さん、ごへんじを ください。」

一郎「はい、五錢の 切手を 一枚 ください。」

花子「ありがたう。」

一郎「林さん、いうびん。」

春枝「何と 書いて あるかしら。あしたから 學校が 始りますが、また いつしよに

行きませう。朝　さそって　ください。」

一郎「すず木さん、いうびん。」

花子「ありがたう。どんなごへんじかしら。

お手紙を　くださって、ありがたう　ございます。

あしたの　朝　きっと　おさそひしますから、待って

ゐて　ください。」

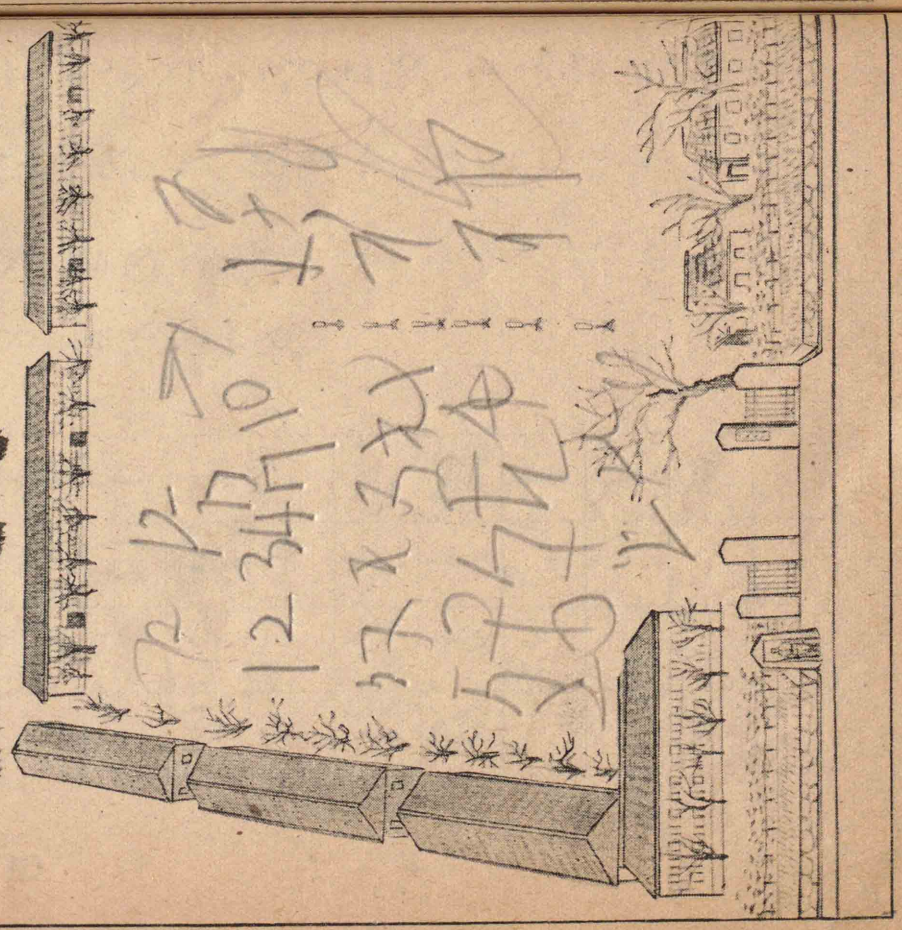
一郎「ぼくも　學校へ　行きたいなあ。」

（三）

いっしょに　行きました。

いっしょに　行きます。

いっしょに　行きませう。



十六　雪の日

(一)

「山は大雪、日はくれる。
烏が急いでかへつたよ。
烏のかん太は寒からう。
き、やすまうよ。」と親すずめ。

(二)

ちらちらと雪がふる。
さらさらと雪の音。

(三)

ちらちらと雪がふつてゐます。
すずめのおとうさんと子どもが、こんなお話をしてゐます。

「山の方は大雪だし、日はくれるし。さつき烏のかん太さんが大急ぎでかへつて行つた。
さぞ寒いことだらう。
さ、やすまうよ。」
かうおとうさんすずめがいひました。すると、子すずめが、
「やすみませう。今夜は雪がだいぶつもるでせう。」
といひました。

まもなく すずめの 親子は、ねむって しまひました。
外では、雪が さらさらと ふりつづいて ゐます。

十七　白兎

(一)

白兎が、島から向かふの陸へ行ってみたいと思ひました。

きみの仲間と、どっちが多いか、くらべてみよう。

かぞへながら、渡って行きました。

大國主神は兄様がたの重いふくろを、せおって いらっしゃいました。

(二)

白兎「きみの 仲間と ぼくの 仲間と、どっちが 多いか、くらべて みようでは ないか。」

わにざめ「それは おもしろからう。」

白兎「きみの 仲間は ずゐぶん 多いな。ぼくらの 方が 負けるかも しれない。ぼくが、きみらの せなかの 上を、かぞへながら とんで 行くから、

向かふの　陸まで　並んで　みたまへ。」

わにざめ一「それでは、みんな　並ぶから　渡って　みたまへ。」

白　兎「一つ、二つ、三つ、四つ……。

きみらは　うまく　だまされたな。　ぼくは　こゝ

こへ　渡って　來たかったのだ。　あははは。」

わにざめ二「よくも　だましたな。　よし、おまへの　からだの

毛を　むしり取って　やらう。」

白　兎「ああ、痛い、痛い。」

大勢の神様「おまへ、なぜ　泣いて　ゐるのか。」

白　兎「わにざめが、私の　からだの　毛を　みんな　むしり

取って　しまったから　です。」

大勢の神様「それなら、海の　水を　あびて、ねて　ゐるが　よい。」

白　兎「痛い、痛い。　海の　水を　あびたので、いっそう

痛みが　ひどく　なった。」

大國主神「おまへ、なぜ　泣いて　ゐるのか。」

白　兎「大勢の　神様が　海の　水を　あびて、ねて　ゐるが

よいと　おっしゃったので、その　とほりに　する。

と、痛みが　いっそう　ひどく　なって、どうにも

たまらなく　なったの　です。」

大國主神「かはいさうに。　早く　川の　水で　からだを　洗っ

て、がまのほをして、その上にころがるがよい。」

白鬼「おかげで すっかり なほりました。あなたは、おなさけ深い おかた ですから、今は 重い ふくろを せおって いらっしゃっても、のちには きっと おしあはせに おなり でせう。」

(三)

陸へ 行って みたいと 思 い ました。

くらべて みゃうでは ないか。

それは おもしろか ろう。

陸へ あがろうと いふ 時。

「あははは。」と 笑 い ました。

水を あびて、ねて いるがよい。

重い ふくろを せおって あらっしゃいます。

十八　たこあげ

(一)

をぢさんに 作って いただいた たこを、あげて 遊びました。

みんなが、「へんな たこ だ。」と いって、笑ひました。

次郎に たこを 持たせて あげました。空で 二三べん まはって、落ちました。

二度めには　あがりましたが、左の　方へ　かたむきます。

三度めに　あげた　時は、まっすぐに　あがりました。

高い　空に　小さく　見えて、すわったやうに　動きません。

みんなが、

「よく　あがって　ゐるな。」

といひました。

(二)

毎日雪が降ったり雨が降ったり

して、たこがあげられませんでした。

三ちゃんは、「なんだ、骨が二本しかないぢゃないか。」といひました。

をぢさんに教へていただいたやうに、たこの糸めをなほして、下糸を少しつめました。今度はあがりました。

(三)

笑ひました
いひました
落ちて しまひました
あげたいと 思ひました

十九　豆まき

(一)

「福は内、鬼は外。」と聲をはりあげて、豆をまきました。
弟が大きわぎをして、豆を拾ひました。みんなで豆を年の數だけたべました。

(二)

太郎「今日は 節分で、豆まきの 日 ですね。」
父「さう だ、太郎、今年から おまへが まくの だ。」
母「神だなに お供へしてから まきませう。」
太郎「もう どこかで、福は 内、鬼は 外と いって ゐますよ。」
父「うちでも そろそろ 始めるかね。」
太郎「少し きまりが わるいなあ。
よし、やらう。福は 内、鬼は 外。」

妹弟「おもしろい、おもしろい。」

太郎「福は　内、鬼は　外。」

妹「にいさん、お上手ね。」

太郎「鬼は　内、福は　外。」

みんな「あははは。」

母「おしまひに　えんがはへ　出て　おまきなさい。」

太郎「鬼は　外、鬼は　外。」

母「鬼が　はいらないやうに　雨戸を　しめませう。」

父「それでは、みんなで、豆を　年の　數だけ　數へて　たべる　ことに　しよう。」

(三)

太郎妹弟「うれしい、うれしい。」

[　　]が、おつしやいました。

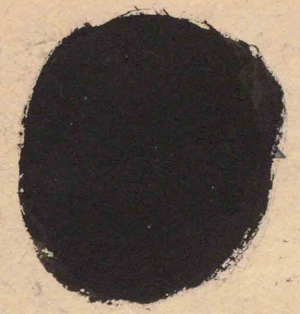
[　　]は、神だなに　お供へに　なりました。

[　　]が、神だなから、ますを　おろして　くださいました。

[　　]が、雨戸を　ぴしやりと　おしめに　なりました。

二十　金しくんしゃう

(一)



(二)

二十三　おひな様

まあ、お久しい、だいり様。
あなたはいちばん上の段。
赤いはかまの官女さん、
三人並んで次の段。
笛やたいこでにぎやかな
五人ばやしは三の段。

あられ、ひし餅、桃の花、
なたねの花も供へませう。

二十四　北風と南風

(一)

冬が終に近づくと、今までは、うとうと眠つてゐた弱い光を出し、暖い光を送るやうになります。

南風は、雪でも氷でも、かたはしからとかして、野や山を暖くします。すると、草や木が、だんだんと芽をふいて來ます。

(二)

北風　びゅうびゅう、びゅうびゅう。雪が降る、あられが降る。水がこほった。これで大ぢゃうぶ。ひと休みしよう。」

南風　「そっと行って、北風の作った雪の山や、池の氷を、少しでもとかしてやらう。」

北風　「おや、南風が來たな。追ひはらってやらう。びゅうびゅう。」

南風「これはたまらない。だが、じんぼうがだいじだ。いまに北風を負かしてやるから。」

お日様「ああ、ああ、いい氣持でねた。どれ、目をさまして、そろそろ暖い光を送るやうにするかな。」

南風「あつ、お日様がお目ざめになった。おい北風、おまへは、もう北の國へかへってしまへ。」

北風「なあに、まだおまへの出て來る時ではない。わたしは、もう一度おまへを追ひはらって、野や山をまっ白にしてやるぞ。びゅうびゅう。びゅうびゅう。そうら、野や山が、また、雪でまっ白になった。」

南風「もう負けてゐるものか。南の國から、大勢の仲間をつれて來て、北風をどしどし追ひまくってやらう。おういい、みんなおいでよう。」

南風の仲間大勢「何だ、何だ。」

南風「さあ、北風に負けないやうに、みんな力を合はせて、雪でも、氷でも、かたはしからとかして、野や山を暖くしよう。」

南風の仲間大勢「よし、やらう。」

北風「大勢出て來たな。なあに、負けるものか。」

南風「暖い雨も降らせよう。草や木が、だんだんと芽を

ふいて、花のつぼみがふくらんで來るから。」

南風の仲間大勢「さあ吹け、さあ吹け。」

北風「これはたまらない。逃げよう、逃げよう。」

南風の仲間大勢「逃げた、逃げた。とうとう、北風もたまらなくなったとみえる。これからは、われわれの世界だ。ばんざい、ばんざい。」

南風「北風が、雪や氷で、野山をまっ白にした代りに、わたしは、赤い花や、みどりの若草で、野山をかざって見せよう。」

お日様「あはははは。」

みんな「春が來た、
春が來た、
どこに來た。
山に來た、
里に來た、
野にも來た。
花が咲く、
花が咲く、
どこに咲く。
山に咲く、

里に咲く、
野にも咲く。」

(三)
南風を追ひはらひます
南風を追ひたてます
北風をどしどしと追ひまくります

答へます
元氣をとりかへします

二十五　羽衣

(一)
じっと空を見あげます。

しをれたやうす。
「羽衣をお返しいたしませう。」
「では、こちらへいただきませう。」
「お待ちください。」

(二)
漁夫は羽衣を返します。天人は、それを着て、静かにまひます。月の都の天人たちは、みんなそろってまひ上手。黒い衣のそろひでまふと、

月はまっ黒やみの夜。
白い衣のそろひでまふと、
月は十五夜まんまるい。

昭和十七年六月二十日　修正印刷
昭和十七年六月廿三日　修正發行
昭和十七年六月廿五日　翻刻印刷
昭和十七年七月廿九日　翻刻發行

昭和十七年六月廿六日
文部省檢査濟

ことばのおけいこ　四
新　定價金拾壹錢　わ

著作權所有　文部省

著作兼發行者　文部省

翻刻發行兼印刷者　東京市王子區堀船町一丁目八百五十七番地　東京書籍株式會社　代表者　井上源之丞

印刷所　東京市王子區堀船町一丁目八百五十七番地　東京書籍株式會社工場

發行所　東京書籍株式會社

初二

赤坂昌子

広島大学図書
0130449510